

2015年度の特集テーマについて

1 特集テーマの背景

「IEレビュー」誌では、年5回発行される各号について「特集テーマ」を掲げ、そのテーマに沿った論壇、ケース・スタディ、プリズムの記事を掲載しています。その他に、巻頭言、連載講座、会社探訪、現場改善、ピットバレーサロンなど、特集テーマにとらわれない記事と組み合わせることで、できるだけ立体的にIEの活用事例、課題、展望を提供するよう工夫しています。各号の特集テーマの意図や背景は、企画担当の編集委員による「特集のねらい」として各号の先頭に示されていますが、年間5冊の特集テーマの背景については、これまで説明する場面を設けてきませんでした。編集委員会でのアドバイスを受け、今年から年間の特集テーマを決めた背景を説明しようと考えています。

特集テーマを検討する際に編集委員長として重視していることは、大別すると2つの項目です。ひとつ目は、IEの適用可能性を探り、対象の拡がりを示すことです。もともとIEは、生産工程のQCDを維持・向上させることを目的として発展してきましたが、近年では、その考え方や手法を前後の工程（生産技術、物流、サプライチェーンなど）に適用する事例、サービス業や農業といった産業分野に使う事例、さらにはグローバル展開を受けて国際的な経営効率や人材育成に応用する事例などが増え、IEの適用範囲は大きく広がっています。さらには、ITの進歩に応じて、IEの手法自体にも変化が求められています。こうした活用事例は、企業や組織のなかに数多く見つけることができますが、その背後にある工夫点まで踏み込んで紹介する雑誌として、「IEレビュー」誌は唯一の存在です。経営から我々の日常生活まで、どんな考え方や手法が活用されているのか、事例を数多く紹介したいと考えています。

2つ目は、改めて「IEの原点」を考える、ということです。IE的な見方や考え方が大切と言われ、その適用対象が広がる一方で、企業活動はグローバル化・スピード化し、IEの専門スタッフを育成しつつ堅実な改善

活動に取り組む企業が増えているとは言い難いと感じています。長期的な人材育成や企業体質強化が重要と分かっているにもかかわらず、短期的に効果のある施策に目が移りがちです。地道に着実な活動を進めるだけでは競争に勝てないという脅迫的な観念は、生産拠点の海外シフトや人件費の変動費化を加速し、IEが重視する標準や改善という考え方を希薄にしていまいます。「IEレビュー」誌がIEの専門誌として存続していくためには、例え時代の流れに逆らうように思えても、常にIEの原点とは何かを問い続ける姿勢が不可欠です。

新年度の特集テーマを検討する合同編集委員会は2014年12月に開かれましたが、そこでは上記の方針を確認した上で、事前に各委員から出されたテーマ候補に基づいて、読者のニーズに応える特集テーマを以下に示すように5つ選定しました。

2 各号の特集内容

(1) わが社の自前設備

多品種化や製品ライフの短期化が進むなか、大きな設備に投資するよりも、小型の設備を内製して固定費のリスクを避け、同時に生産技術力や設備保全力を蓄積しようという動きが広がっています。また、多くの製造業で、からくり改善[®]が活発に進められています。そこで、単に自動化やからくり開発の事例を紹介するのではなく、IEの視点で、例えば現状作業のどこをどのように工夫して自動化したか、どういうねらいでからくりを考えたかを吟味することで、設備化の際に大切な知恵や工夫点をまとめて示したいと考えました。自動化するか匠の技能で対応するかといった二者択一的な議論ではなく、自動化のために匠の作業を分析するような視点が、これからのIEの発展に不可欠になると考えています。設備を自前で開発することは、投資額を抑え、保全の力を高めます。自前設備開発のプロセスや考え方に踏み込むことで、IEの新たな展望を示したいと考えています。

(2) 本質的安全への取り組み

「IEレビュー」誌では、これまで安全の問題に絞って

特集テーマを企画することはなかったと思います。どちらかと言えば、安全は当然の要件として、その上に成立する生産性向上やQCDの改善事例を多く取り上げてきました。しかし、昨今の事例には、当然保証されるべき安全が十分に担保されていないケースも見られます。安全は一度でも崩れると、消費者や働く人たちに危険を及ぼすだけでなく、長期的に企業の経営に大きなダメージを与えます。QCDの原点として、今一度安全の本質を見つめ直し、ヒヤリハット、KY(Kiken Yochi)活動、ZD(Zero Defects)活動など、本質的安全への各社の取り組みを整理してみようじゃないかという企画です。フールプルーフ、フェールセーフ、ポカよけ、教育体制強化、生産性との両立などの事例を紹介したいと考えています。

(3) カスタマーの視点を活かした職場改善

IE活動を進める際、現場を重視し、いかに活性化や技能伝承を進めていくかは極めて大切です。「IEレビュー」誌でも、「現場改善」という記事を毎号掲載するだけでなく、ほぼ毎年、何らかの切り口で現場改善特集号を企画してきました。そうした流れのなか、来年度は、製品のユーザーである顧客の視点を活かした職場改善を特集することにしました。例えば、電化製品開発や重筋作業改善における女性の視点の活用、高齢の方や外国の人でも働きやすい職場づくり、若者が楽しく働ける職場づくりなど、サプライサイドの視点だけでなく、ユーザー目線での現場改善や職場づくりの工夫を取り上げる特集です。当然に、多様化への対応、技能の技術化、標準資料整備など、IEの視点からこのテーマを掘り下げようとする企画です。

(4) ビッグデータの活用

このテーマは、まさしく今社会の注目を集めています。しかし、単にビッグデータを広く扱うのではなく、IE的な視点を取り入れた活用法を特集したいと考えています。データやITツールをいかにして改善活動や人材育成に結びつけるかなど、データ活用から見えてくる新たなIEの可能性を考えることで、他の領域で言われているビッグデータのブームとは差別化した特集を組みたいと考えています。

(5) ものづくり組織が意味すること

近年、ものづくりセンター、ものづくり技術部など、ものづくりと冠する組織が様々な企業に誕生しています。また、「ものづくり」は一般用語としても広く用いられています。さらには、「モノづくり」「物造り」など、記述方法へのこだわりや違いも見られます。一般に、ものづくりという用語は、生産や製造よりも広く、サプライチェーンや人材育成などの間接業務も含めて用いられますが、各企業では「ものづくり」と称する部門や機能にどんな役割を期待しているのでしょうか？ ものづくりに関連する部門の名称はこれまでどのように変遷し、「ものづくりを強化する」とは何を意味しているのでしょうか？ そうした考察から、部門名の変化がIE活動の内容や範囲に与えるインパクト、企業の生産性、効率、体質、体力、意識、改善力といった項目との対応や、各項目の重要性の変化を改めて考えます。当然に、グローバル化のなかでの日本のものづくり、という視点も含まれることになります。依頼原稿だけでなく、座談会や取材も含めて深掘りしたいと考えています。

3 おわりに

以上の特集テーマの他に、匠と呼ばれる高度な技能者の持つ経験値を紹介するコーナーや、過度のIT依存について再考する記事など、プリズム的な情報提供やピットバレーサロニックな記事を強化していくことも編集委員会で、確認されました。

「IEレビュー」誌は、最新の事例を単に紹介するだけでなく、背後にある考え方や工夫点をできるだけ盛り込むことで、IEの考え方を普及させ、その適用可能性を広げていくことをめざしています。読者の皆様とともに充実した誌面を作っていきたいと考えていますので、様々な形でのご支援を宜しくお願いいたします。

(編集委員長／河野宏和・慶応義塾大学)

発行年月	号	特集テーマ(仮題)	担当協会
2015年	5月	290 現場の困りごとを聞こう	日本
	8月	291 わが社の自前設備	九州
	10月	292 本質的安全への取り組み	東北
	12月	293 カスタマーの視点を活かした職場改善	中部
2016年	3月	294 ビッグデータの活用	関西
	5月	295 ものづくり組織が意味すること	日本

図表1 これからの特集テーマ